

吉野作造と明治文化研究会

——「ヘーゲルの法律哲学」から「嘆きの天使」まで——

堅 田 剛

一 『故吉野博士を語る』

結核療養の末、吉野作造が亡くなったのは、昭和八（一九三三）年三月十八日のことである。その一周忌に当たって、娘婿の赤松克麿は追悼文集『故吉野博士を語る』を編集し、中央公論社から刊行した。寄稿者は三十五名。同書は、吉野の晩年の人的交流を知るための恰好の資料集となった。

赤松は三十五編の追悼文を寄稿者の姓名のイロハ順に配列しており、そこに肩書きの類はいつさい記していない。追悼文集の編集方針としては、妥当な態度といえよう。吉野作造の死を純粹に悼む者だけが、社会的な立場を超えて文章を手向けた体裁をとっている。

しかしそうはいっても、吉野作造という人物をあらためて検証するためには、編者の意図には反するけれども、やはり故人との関係を明らかにしながら追悼文を読んでいく作業が必要になる。もちろん、ここで実際におこなう

のは、その一部のみ、とくに明治文化研究に限定してのことにすぎない。

三十五人の寄稿者のうちで目立つのは、当然ながら吉野作造の親族たちである。たとえば編者の赤松克麿は作造の二女明子の夫であるが、克麿のほかに明子自身も娘として追悼文を寄せている。同様に小松清と妻光子の名前もみえるが、光子は作造の三女である。さらに作造の六女の吉野文子と、弟の吉野信次も追悼文を書いている。

次に東京帝国大学の同窓生というより、むしろ同大YMCA(学生基督教青年会)の仲間たちがいる。今中嘉幸、河田茂、内ヶ崎作三郎、栗原基といった人たちである。このうち、内ヶ崎と栗原は仙台の出身で、吉野作造の「第二高等学校時代からの親友であった」。

そして、明治文化研究会の同人たちである。今中次麿、尾佐竹猛、川原次吉郎、斎藤昌三、木村毅である。娘婿の小松清も、吉野との関係で、明治文化研究会の仕事を手伝ったことがある。

その他にも、長谷川如是閑、大内兵衛、河村又介、真山青果、牧野英一、清沢洌、白柳秀湖、などの名前がみえる。大内と牧野は東京帝国大学の同僚であった。

以上、「故吉野博士を語る」への主要な寄稿者について、ほとんど名前のみを挙げてきた。もちろんすべての寄稿者を紹介したわけではないのだが、この程度で切り上げて論述を進めたい。

実は『故吉野博士を語る』に収載された追悼文は、そのすべてが書き下ろしであったわけではない。前述したように、吉野が亡くなったのは昭和八年の三月だが、『中央公論』は同年の五月号で「吉野博士を偲ぶ」という小特集を組んで、そこに八人の寄稿者を得た。執筆者と題名を掲載順に掲げると次のようになる。

吉野信次「兄の中学に入る迄」

真山青果「青年時代の吉野君」

内ヶ崎作三郎「吉野作造君と私」

牧野英一「親切と楽天」

長谷川如是閑「吉野作造博士と彼れの時代」

赤松克麿「人道の戦士吉野作造」

尾佐竹猛「吉野博士の明治文化研究に就て」

佐々弘雄「吉野作造博士とデモクラシー」

家族、青年時代の友人、大学の同僚、政治活動の同志、明治文化研究会の同人といったように、吉野作造の生涯と業績をほぼ網羅しており、二十年にわたって吉野と伴走してきた『中央公論』としては、彼の死に際して相応の敬意を払っているにはちがいない。だが目次の編成を眺めるかぎりでは、吉野追悼の小特集は、たとえば「非常時後継内閣座談会」とか「ヒトラー論」のような記事に押されて、巻末近くに追いやられているようにもみえる。嶋中雄作社長の哀悼の辞が付されているもの、比較的あっさりした編集後記とも相まって、なんとなく淋しい扱いなのである。吉野が病没した昭和八年は、日本が国際連盟を脱退し、ドイツではヒトラーが政権を獲得した年であった。

赤松はこれらの追悼文をもとに、さらに数多くの追悼文を加えることによって、昭和九(一九三四)年四月に中央公論社から出版した、『中央公論』の小特集の拡大増補版である。¹⁾

本稿は吉野作造と明治文化研究について論じようとするものであるから、追悼文についてもそれに関するものに

ついでだけ言及し、他のものは割愛しようと思う。しかし、明治文化研究とは無関係ながら、牧野英一の文章だけは紹介しておきたい。それには二つの理由がある。一つは、牧野が追悼文（ネクロロジ）の名手であったということだ。牧野自身が長命であったということもあるが、彼は実に多くの追悼文を書いた。²⁾ その彼が吉野作造について何を書いたかに興味がある。もう一つの理由は、牧野の追悼文は、吉野のあまり知られていない側面に言及しているように思えるからだ。それは一言でいえば、法哲学者としての吉野作造についてである。

牧野英一は、わが国における新派刑法学の先駆者であり、吉野作造との関係では東京帝国大学での三十年来の同僚であった。牧野は「親切と楽天——吉野君についての思ひ出——」と題した文章を寄せている。常に他人のために尽くし決して悲観することのない吉野の人間性を、牧野は「親切と楽天との人」と評した。それはけっして追悼文にありがちな儀礼的な表現ではなく、吉野の人間性の本質に迫ったものであるように思える。

牧野は学生時代の吉野に言及するのだが、そこに現れるのは法哲学者としての吉野作造である。

「吉野君は、大学の在学中に、ヘーゲルの法律哲学を書いた。これは、法理学演習の課題に対する答案であったのである。その時はわれわれは全くおそれいたものである。民法実施後間もない日露戦争前のその当時において、ヘーゲルの法律哲学をのぞいて見ようといふことは、全くできない相談事でもあったからである。穂積老先生から、わたくしは、社会主義と法律といふ課題を受けたのであったが、その当時において、これも、甚だ難問題であったのである。抽象的な社会主義論を具体的な法律論に組立てねばならなかったのである。しかし、吉野君のヘーゲルの法律哲学はもつと難問題であったのである。それを吉野君はとにかく仕遂げたのであった。学生時代のその論文は、法理研究会から、穂積老先生が刊行された。」³⁾

文中の「穂積老先生」とは、穂積陳重のことである。彼の息子の重遠とは吉野も牧野も帝大法科の同窓であり、彼らは三人とも教官として同僚になったので、陳重は重遠と区別して老先生と呼ばれていた。若先生の穂積重遠は、のちに明治新聞雑誌文庫の後援者となり、間接的に明治文化研究会を支えることになる。

それはともかく、穂積陳重の法理学演習に吉野作造と牧野英一が参加し、それぞれ「ヘーゲルの法律哲学」と「社会主義と法律」の課題に取り組む姿は、思想史的観点からしてもきわめて刺激的な構図である。一方は政治史学者になり他方は刑法学者になったとはいえ、ここから二人の法哲学者が誕生したかもしれないからである。

吉野が法理学演習に参加したのは、明治三十六(一九〇三)年のことである。そして牧野が指摘しているように、このときの吉野の課題論文は、翌々年に『ヘーゲルの法律哲学の基礎』として有斐閣から公刊された。吉野作造二十七歳、彼の初めての著書であった。

吉野作造はいわゆる法哲学者にはならなかった。この点についても牧野の観察は鋭い。「吉野君は、その後、哲学論をすることを止めた。しかし、吉野君は、ヘーゲル哲学のその論文にあらはれてゐるやうに、哲学を好いた。ただ、哲学をふりまわすことをしなかつたのである。自分の哲学に十分のいぶしをかけて、その社会時評をつづけ、その政治論を進めたのであつた」。たしかに、吉野は哲学者にはならなかったが、「自分の哲学」は終世にわたつてもちつづけた。それは、キリスト教精神にもとづく人道主義であつただろう。

吉野作造は明治四十三(一九一〇)年から欧米に留学したが、ベルリンで同じく留学中の牧野英一に会っている。彼らは専門を異にしたけれども、牧野の回想によれば、「社会主義と哲学」が当時の共通の問題であつた。彼らはドイツ社会民主党について議論したり、新ヘーゲル派について哲学論を交わしたりした。帰国後の「吉野君の

「予言事件」についても、牧野は紹介している。第一次大戦後のある講演会の席上で、吉野はドイツ革命の不可避に言及して聴衆の失笑を買ったが、その翌々日に革命勃発の電報が入ったというのである。こうしたことも、単なる書物上の知識ではなく、ドイツ滞在の見聞にもとづいているにちがいない。

吉野作造と牧野英一は、穂積陳重の還暦に際して、共同で祝賀論文集を編纂した。陳重門下には多くの人材がいたにもかかわらず、論文集の編纂という面倒な仕事を引き受ける者が他にいなかったためだ。陳重が還暦を迎えた誕生日の朝、吉野は師の書齋において祝賀論文集を贈呈した。こうした麗しい師弟関係を聞くにつけても、陳重の法理学演習で育った吉野作造と牧野英一という二人の秀才が、ともに法哲学（法理学）の専門家にならなかったことが惜まれる。少なくとも日本において、法哲学がいまだ独立の専門領域として認められていなかったこともあつたのだ。

惜しいといえば、牧野英一が明治文化研究会に参加しなかったことについても同様の観がある。やはり追悼文の中で、牧野は述べている。「吉野君の仕事は、漸次更に、社会事業と明治文化研究とに拡がつていった。わたくしはその双方に共に興味を持つたものではあるが、何分にも大学の教職がわたくしにとつて甚だ繁劇なので、遺憾ながらそれに参加することができなかつた」。

ただし、教職が忙しかつたから、というのはいささか疑わしい。東京帝国大学法科大学において、社会事業ばかりでなく明治文化研究をなにか胡散臭いものとして、一定の距離をおこうという雰囲気があつたことは否めない。明治新聞雑誌文庫の設立には積極的に協力した穂積重遠や中田薫でさえも、明治文化研究会には参加しなかつた。明治文化研究会には奇人や怪人が蠢いていたし、その周りを妖艶な天使たちが飛び回っていたせいだろうか。

二 明治文化研究会の人々

帝大教授たちにとって、明治文化研究会が胡散臭い集まり、むしろいかがわしい集まりと映ったとしても、わからぬでもない。明治文化研究会は、不敬罪の外骨をはじめ博奕好きの尾佐竹判事やエロ物専門の斎藤昌三など、得体の知れない怪人たちの巢窟であったからだ。明治文化研究会と吉野作造の関係については多くの考察がみられるが、文化人類学者の山口昌男による研究はとりわけ異彩を放っている。その題名は、「大正日本の『嘆きの天使』——吉野作造と花園歌子——」というもので、ここに描かれているのは、とかく聖人君子として語られがちな吉野とは対極の人物像である。

しかし、この奇抜な吉野論は、山口のあまりの博識のゆえに脇道や枝道が多すぎてかえって本筋を見失いかねない。ここは『故吉野博士を語る』を道案内にしなから、明治文化研究会の研究として整理しておきたい。

明治文化研究会は、大正十二(一九二三)年九月一日に起きた関東大震災を契機に設立された。震災では江戸期や明治期の貴重な資料が大量に焼失したが、このことに危機感を抱いた好事家たちによって組織されたのである。

吉野作造も被災者の一人であった。娘婿の小松清は、震災当日の吉野につき、「義父と蒼い空」と題する文章を『故吉野博士を語る』に寄せている。

「大正十二年の大震災の日だった。午後の三時か四時頃、一高の前の通りで大学の方から来た友人に遠くから私は何となく笑ひかけた。さうするとその友人の少しあとから義父が来て私の笑顔に答へてにこにこして近づいて

来た。私はおじぎをして向ふでもそれに答えて、二人とも一言も云はずに行き違つた。電車が止つて了つたので神明町の自宅の方へ歩いて行くところだつたらしい。

あとで大きくと大学で研究室の本を整理して出て来たところだつた。そしてその晩大学の火事で十年以来あつめた研究材料が全部焼けて了つたのださうである。⁶⁾

あれだけの大地震の直後であるから、大学の構内も周辺も多くの建物が崩壊していたはずであるが、「蒼い空」の下、互いの無事を確認して笑顔を交わすほどの余裕はあつたようだ。吉野の研究室も書物が散乱した程度で済んだようで、彼はそれを整理して外に出た。ところがその晩に構内で火災が発生し、洋書は持ち出されたようだが、和書は灰燼に帰した。⁷⁾つまり吉野が蒐集した明治文化関連の資料は壊滅的な打撃を受けたのである。それは悲劇にちがいないけれども、こうした不幸な体験が、明治文化研究会と明治新聞雑誌文庫を設立するきっかけになつた。

吉野は大震災の混乱に乗じておこなわれた、朝鮮人虐殺や大杉栄暗殺といった事件について、論文等で激しく抗議している。このこと自体は周知のことからである。けれども山口昌男は、「大正日本の『嘆きの天使』」において、さらに衝撃的な事実を明らかにしている。それは、大杉栄だけでなく吉野作造に対する暗殺計画も当時の陸軍内部にあつた、ということである。幸い実行にはいたらなかったものの、一部の勢力から吉野は大杉と並ぶ危険人物とみられていたということである。⁸⁾山口は、生前の吉野はそれを知らなかったというが、身の危険にも無頓着なほど「楽天」的であつたということか。

明治文化研究会の構想が具体化したのは、吉野作造の日記によれば、震災の翌年の大正十三(一九二四)年十月

二十六日のことである。この日、吉野のもとを宮武外骨と助手の井上和雄が訪れて、研究会の発足について打診した。⁹⁾ 吉野は即座に快諾して尾佐竹猛や石井研堂なども誘うことにした。前にも触れたが、外骨は不敬罪の前科者、尾佐竹は博奕好きの大審院判事である。また、石井が編輯した『小国民』は、吉野の少年時代の愛読誌であった。彼らはみな明治文化の研究者で、それぞれ精力的に古本漁りをやっていた。

この話は急速に進み、三十日には発起人会が開かれた。発起人となつたのは、吉野作造、尾佐竹猛、宮武外骨、石川巖、小野秀雄、井上和雄の六名であつたが、これに石井研堂や齋藤昌三なども次々に加わつた。明治文化研究会が正式に発足したのは、翌十一月のことである。会長には吉野作造が就任した。

『明治文化全集』の刊行など明治文化研究会の業績については言及されることが多いけれども、同人たちの人間関係のほうが見ようによつてはもとおもしろい。そのうちの一人齋藤昌三であるが、彼もまた本の虫たる「書痴」であることを自認していた。吉野は「齋藤昌三観」という文章を書いて、齋藤は「エロ物専門家」という評判だが自分はその方面のことはよく分らないと、とほけている。¹⁰⁾ 齋藤昌三の追悼文「菟蕪と猥談」は、これに対するお返しである。この追悼文は、『中央公論』ではないが齋藤の主宰する『書物展望』の同じく五月号に公表され、その後『故吉野博士を語る』に転載された。明治文化研究会のあと、本郷追分のおでん屋に流れることが通例であつて、吉野はいつも消化の悪そうな菟蕪を食べていたというのが、題名の「菟蕪」の由来だ。齋藤はこれにつづけて吉野の「猥談」につき次のように証言している。

「たしか文化会同人の一人だつたと思ふ。学士会館か何処かで渡欧の送別会があつた折、喫煙室で、先生いふ、巴里に行つた画家は大抵記念はがきを作つて呉れるものだ。自分(博士)も鹿子木(?)君から貰つて帰つた

が、モデルの写生が一通り済むと、モデルの前の毛に絵具を塗らしてはがきに押させ、それにサインさせて記念にするさうだが、君(送別の人)も巴里へ行つたら一枚手に入れて斎藤君の為に送つて上げて下さいと、真面目で説明されたことがあつた。¹⁴⁾

野暮な解説を付け加えておく。文中の「鹿子木(?)君」とは、画家の鹿子木孟郎のことであらう。¹⁵⁾ 彼がパリで修行していたとき、留学中の牧野英一と吉野作造は相次いでパリに滞在している。斎藤の文章には牧野の名前はな
いが、牧野と吉野は一緒に鹿子木のアトリエを訪れたのかもしれない。もしかするとそのとき鹿子木はちょうど裸婦の写生中で、「記念はがき」はそこで貰つたものかもしれない。なお、牧野の追悼文によれば、当時、吉野は「カルチエラタンの下宿屋で、ポーランドの女学生たちの間に交つたりなどして、おもしろい資料を集めてゐられた」¹⁶⁾ である。吉野作造も牧野英一も後生大事にパリみやげを持ち帰つたのではないか。吉野は「親切」にも、渡欧を控えた明治文化研究会の同人に対して、同様の記念はがきを斎藤にも送るように依頼している。

さて、斎藤の記憶にいう「文化会同人の一人」とは、文学者の木村毅のことだろう。木村の留学送別会で撮影された研究会同人の集合写真が遺されている。これには、吉野作造と木村毅はもとより、斎藤昌三、尾佐竹猛、今中次麿、柳田泉、といった面々が写っている。¹⁷⁾ 昭和三(一九二八)年四月二十八日のことで、場所は葉山の「かぎや」旅館である。上記の引用文には「学士会館か何処かで」とあるので、具合が悪いのだが、ここは斎藤の記憶違いに期待したい。斎藤は同じ文章で、木村のことを「先生に次での猥談家」と評しているからである。¹⁸⁾ 木村毅は、のちに明治文化研究会の第三代会長を務めることになる。パリの木村が、吉野の指示にしたがつて、斎藤に例の記念はがきを送つたかどうかはわからない。

木村毅は「吉野博士と明治文化の研究」を書いて、明治文化研究会の共同作業であった『明治文化全集』の刊行につき、吉野作造の功績を称えた。

『明治文化全集』は、確かに博士の遺された意義ある業績の一つである。

これを銅像にたとへる。

人目に隠れて、コツコツと刻み上げて、ほゞ完成してをられたのは尾佐竹猛博士であった。

併し、それは未だ曼幕に掩はれてゐて、大衆の近づき得る所とはなつてゐなかつた。

これが綱を引いて、除幕式を行つて、明治文化研究を大衆のものとし、大衆の自由検討の材料にせられた功績は、吉野博士にある。¹⁶

『明治文化全集』のみならず明治文化研究会の活動そのものにおいて、吉野作造の存在はたしかに大きい。研究会の結成当時、吉野はすでに東京帝国大学を依願退官していたが、なお帝大法科を代表する政治学者であった。また、政治活動や社会活動の実践面において進歩的勢力の象徴的存在でありつづけたことも、周知の事実である。外骨らが吉野に研究会の構想を持ちかけ彼を会長に推したのも、吉野がもつ帝国大学の権威や社会的名声と無関係であったとはいえない。

だが当初はそうであつたとしても、吉野自身が蓄積してきた明治文化への造詣の深さや彼の「親切」で「楽天的な人柄こそが、研究会をまとめてきたのである。宮武外骨といい、尾佐竹猛といい、斎藤昌三といい、明治文化研究会にはいずれも一筋縄ではいかない怪人たちが巣くっていた。研究会における手持ち資料の品評や罵倒を交え

た議論のあとで、吉野作造はともに「崑蕪」を食い「猥談」に加わっては、猛獣どもを手なずけた。¹⁷⁾

当たり障りのない追悼文を寄せたようにみえる木村毅でさえ、その最初のほうではこう書いている。「博士が、明治文化の研究に着手せられた事が、ほつほつ世に現はれ初めたのは震災後である。最初は私達は、これを馬鹿にしてゐた。後に博士も認められた通りに、着手し初めと云ふものは全体的な見通しがきかないから、世間では既に分り切つたことを、さも珍しそうに書き立て、ある弊がよくある。博士の研究にも又それがあつた」¹⁸⁾。外骨や尾佐竹や齋藤などとは異なり、参加の時期からいっても木村毅は研究会の第二世代である。それが追悼文を捧げる相手に対して、臆面もなく「馬鹿にしてゐた」などと書いてしまうのだ。明治文化研究会は、そうした非常識な人々の集まりであつた。

木村毅は、自分の専門であるはずの文学の領域においても、吉野が資料の収集とその考察に尋常ならぬ力量を有していることやがて気づくことになる。たとえば、唐人お吉関連の資料や、徳富蘇峰に対する評価や、探偵小説の研究への吉野の関わりにおいてである。『明治文学全集』の文学篇は木村の担当であつたが、彼は途中で留学することになった。その送別会については前に述べた。いよいよ出発のときである。木村はある資料の存在が気に入り、後ろ髪を引かれる思ひであつた。「そしてそれを博士に手渡し得たのは、私が洋行するため東京駅を立つ朝の事で、あのひどい混雑の中で、それを見送りに来て下すつた博士の外套のポケットに押しこんでおいたのだ」¹⁹⁾。二年後に帰国したところ、その資料は文学篇にきちんと収載されていた。吉野が名目上の編集責任者であるに留まらず、専門外の編集作業まで実際に手がけていたことに、木村は深く感銘した。

今中次麿も、明治文化研究会の第二世代である。彼は、大学時代、吉野の教え子であつた。その追悼文は短い、「教壇の吉野先生」と題して、吉野作造の政治史の講義は牧野英一の刑法と並んで学生に人気の授業であつた

ことを述べている。²⁰⁾

やはり明治文化研究会に関わったことがあるようだが、川原次吉郎の「政治学者及び政治史家としての吉野博士」には、みるべきところがない。吉野の政治思想を、理想主義と現実主義の総合という意味か、「プラトンの発展としてのアリストテレス」と評するなど、陳腐にすぎる感は否めない。²¹⁾

以上、『故吉野博士を語る』から、明治文化研究会同人の追悼文を中心に紹介してきた。もつとも、研究会の實質的な提案者であった宮武外骨と、第二代会長になった尾佐竹猛の追悼文については、まだ紹介していない。だがその前に、追悼文は書かなかつたものの、研究会同人ではあつた「嘆きの天使」についてぜひとも論じておきたい。吉野作造にとっては、はなはだ迷惑な話かもしれないのだが。

三 「嘆きの天使」たち

さて、「嘆きの天使」こと花園歌子である。山口昌男が「大正日本の『嘆きの天使』——吉野作造と花園歌子——」を書いたことは、すでに言及した。その内容は吉野作造論というよりは、むしろ花園歌子論である。いや、それよりも歌子の背後に蠢く、無政府主義者の黒瀬春吉や興行師の正岡容について書きたかつたのかもしれない。彼らはそれぞれ、歌子の第一の夫と第二の夫であつた。けれども、直接に交流があつたのは、吉野作造と花園歌子である。ここはやはり、明治文化研究会の枠の中で二人の関係を論じたほうが見通しがよくなるだろう。

花園歌子とは芸名であるが、彼女は日舞のみならず洋舞も舞台で披露する「モダン芸者」であつた。と同時に、花柳文化に関する古書の蒐集家でもあつた。山口が着目するのは、花園歌子の名前で出された、『芸妓通』という

昭和五(一九三〇)年発行の書物である。これには「花柳文化研究資料」という文献目録が再録されているのだが、山口はこれに吉野作造が序文を寄せていることを発見した。

「花園女史は商売柄に似合はず。と云つては失礼かも知れぬが、同じ商売の他の多くの婦人達とは違つて、早から近代文化の特殊な一断面の研究に心掛けられて居る。蔵書の豊富なることに於てはカーライルの所謂 *erudition*〔鉞床——堅田注〕を兎も角も作り上げられたと謂てよからう。完成までは更に一層の努力を将来に注がれる必要はあらうが、併し此の部門につき之れ丈の文献を集めて居る処は他に余り例はなからうと考へる。この点に於て私共は大に女史の勞を多とするものである。」⁽²⁾

この文章の筆者は「千虎俚人」なる筆名を用いているが、それが吉野作造であることは明らかだ。すぐ次につづく文章で、花園歌子本人が証言しているからである。もちろん、吉野の序文そのものは、先学が後進を「親切」に励ますものであつて、別に疚しいものではない。西洋人の名前を引き合いに出し英単語を交えるなど、いかにも學者らしい物言いである。ところが、直後の歌子の説明は妙に色っぽいもので、どうみても単なる弟子の挨拶とは思えない。

「右はかれこれ二年前に、恩師吉野作造博士が私の貧弱な蔵書目録のために恵まれた匿名の序文だが、濡れぬさきこそ露をも厭へ、今となつては誰だつて博士と私の仲を、滅多に顔も合はせたことのない、学問上のお安い関係と知らぬ者はないのだから、別段御遠慮申上げる必要もあるまいと思ふ。天下晴れて茲に博士の尊名を掲ぐ

る光栄に浴した次第である。

私のような境遇にある者が、斯うして筆を執つて人交じりすることが出来るやうになつたのは、全く私の蒐集癖が博士のお見出しにあづかつたお蔭である。私はまだ一度も博士に四畳半の方でお目に掛つた事はないが、また博士がそんな方面にお近づきのおありになる方かどうかともよく知らないが、兎に角博士も私のような押し掛け弟子に取つ着かれては、何かにつけて嘸御迷惑の甚しいこと、恐察する。が、今更らどうも仕方がない。²³⁾

穏やかならざる文章ではないか。千虎俚人こと吉野作造は、花柳文化関連の蔵書目録を「兎も角」作り上げた歌子の労を称えている。歌子は、「兎に角」吉野には迷惑だつたらうと忖えている。この程度の言葉の対応は偶然にしても、なおそれだけではすまない雰囲気が漂っていないだろうか。もちろん、歌子は、自分は吉野の「押し掛け弟子」にすぎず、「四畳半」で会つたことなどないと断っている。けれども、匿名の筆者が吉野作造であることを明かすことによつて、歌子は吉野作造との特別の関係を誇らしげに公表しているのだ。一般に「千虎俚人」の実名が知られていたか否かは、どうでもいい。問題は、「博士の尊名を掲ぐる光栄」をことさら強調する歌子の心理である。

これも山口によれば、吉野作造に花園歌子を紹介したのは、斎藤昌三であつたようだ。「エロ物専門家」とからかつた吉野に、「崑崙と猥談」を献じた、あの斎藤昌三である。古書蒐集の手ほどきを受けさせるため、斎藤のもとに歌子を送り込んだのは第一の夫黒瀬春吉であつたと、第二の夫正岡容が証言している。²⁴⁾ 斎藤は昭和二(一九二七)年の一月に銀座の松屋で「明治文芸研究資料展覧会」を開催したが、吉野と歌子が出会つたのはその展覧会においてらしい。もっとも、山口の推測は、斎藤昌三の記述とも正岡容の記述とも微妙に食い違つるところもあり、あ

らためて検証する必要がある。しかしながら、古書蒐集が機縁となって、このころ吉野と歌子が出会ったこと自体はまちがいない。

花園歌子は、こうして明治文化研究会の紅一点となった。歌子は『明治文化全集』に収載資料の解題を執筆したり、研究会の機関誌である『明治文化研究』に論文を寄せたりした。それらは香具師や遊郭や墮胎医に関するものが多く、いかにも歌子ならではのものである。だが中には「憲政史上の隠れたる一頁に就て」といった、明らかに吉野作造を意識した文章もある⁽²⁶⁾。歌子は、昭和四(一九二九)年には、自身の研究の集大成として、婦人文化研究資料展を開催した。斎藤や吉野などが協力したのは、いうまでもない。

この程度の交流なら、どうということはない。ところが、山口はさらに、大倉燐子の「吉野作造博士の側面」という文章を引用して、さらに刺激的な事実を披瀝する。大倉燐子は国学者物集高見の三女で、探偵小説家である。彼女もまた、吉野の学生時代から交流があり、吉野との縁で外交官と結婚した。大倉燐子の文章は、昭和三十四(一九五九)年に、斎藤昌三が主宰する『日本古書通信』に発表されたものである。吉野の生活ぶりがよく描かれており、非常に興味深い文章だけれども、ここでは花園歌子との関係についての一節を中心に引用する。

「先生はやさしくつておとなしいせいだろうか、よく女の人から騒がれた。かの有島武郎と心中した波多野秋子も有島氏と問題を起す前後、吉野さんを追つ駆けていると云う噂があつたが真偽は知らない。後に花園歌子が先生を追い廻わしていたが、ものにならなかつたと云うことを聞いた。先生の口からも聞いたが、ある宴会の席上で歌子自身が、

『私は先生が葉山の日蔭茶屋で寝込んでいらつしやると聞いてお見舞に行つたんですよ。そうしたらおるすで

した。仕方がないから、私は一人で海を見て帰りました。たつた一人で海を眺めて——」と云つた言葉に、何んとも云えぬさびしさがあつた。

先生はまたこんなことを云つた。

「花園歌子は才女ですよ。僕が欲しい欲しいと思つていて手に入らない古書を、何時どこで手に入れたのか買つて送つてくれたりしました。僕の欲しいものをよく知つている。」

このあとに、大倉燁子は「女はこの二人しか知らなかつた」とつづけている。すごい証言である。吉野作造が關係をもつた二人の女性が、波多野秋子と花園歌子であつたことを強く示唆している。

波多野秋子は、作家の有島武郎と恋愛關係に陥り軽井沢の別荘浄月庵で心中した、「軽井沢心中事件」のヒロインである。大正十二（一九二三）年六月九日午前二時ころの出来事である。この秋子が、事件の前後に吉野作造とも交際していたとしたら、例の心中事件もまた違った意味を呈することになる。詳細は不明だが、秋子は『婦人公論』の記者であり、この雑誌は『中央公論』の姉妹誌であつたから、仕事を介して秋子と吉野に交際があつたとしても不思議ではない。ということは、秋子の心中の相手が吉野であつたとしても、不思議ではないということだ。

有島は吉野と同年で友人同士でもあり、容貌も生き方も似ていなくはない。

もう一人の花園歌子については、すでに述べてきた。付け加えるべきは、葉山の日蔭茶屋での出来事である。この割烹旅館から誰もが想起するのは、大杉栄が愛人の伊藤野枝と宿泊していたところ、同じく愛人で『東京日日』の記者であつた神近市子が乱入して刃傷沙汰におよんだという「日蔭茶屋事件」である。大正五（一九一六）年十一月九日未明のことであつた。「押し掛け弟子」の花園歌子が吉野作造を見舞いに訪れたのは、大正十四（一九二

五)年の七月か八月のことだろう。このころ吉野は葉山の「かぎや」旅館で療養していた。明治文化研究会が発足した翌年のことである。歌子は刃物を持参したわけでも吉野を襲ったわけでもないのだが、事情を知る者は、この訪問を第二の「日蔭茶屋」事件の発生かと受け止めたにちがいない。結果として歌子は吉野に会えなかったものの、吉野が居留守をつかったのかもしれない。いずれにせよ、この時期の吉野日記が不備なこともあり、詳細はわからない。

「日蔭茶屋事件」の大杉栄と伊藤野枝は、関東大震災からまもなくの大正十二(一九二三)年九月十六日に、憲兵隊の甘粕正彦大尉によって惨殺された。世にいう「甘粕事件」である。同じころ、吉野作造に対する暗殺計画があったということは、前に触れた。大杉と吉野は思想的には直結しそうにないが、あいだに黒瀬春吉を入れると妙につながる。大杉と黒瀬は無政府主義者の労働運動仲間であったことがある。²⁸そしてこの黒瀬春吉は、花園歌子の夫であった。憲兵隊や特高は、こういう人間関係を知っていたはずだ。

吉野作造を軸に、あらためて時系列に整理してみるとこうなる。第一の日蔭茶屋事件(大正五年十一月)―軽井沢心中事件(大正十二年六月)―甘粕事件(大正十二年九月)―第二の日蔭茶屋事件(大正十四年七月か八月)。最初のを除いてあとの三つは、吉野作造が生命を脅かされた可能性がある事件である。そのうち、軽井沢心中事件の波多野秋子と第二の日蔭茶屋事件の花園歌子が、吉野作造の二人の女性だということになる。

山口昌男は、花園歌子を「嘆きの天使」と呼んだ。ドイツ映画の *Dar Jane Engel* で、マレーネ・ディートリヒが演じた踊り子ローラ・ローラに歌子をなぞらえているわけだ。つまり、彼女の虜になって身を持ち崩したラート教授は、吉野その人ということになる。²⁹ 実際の吉野作造がラート教授のように旅芸人の道化師になってしまったわけではないものの、しかし、歌子との関係においてそうした危険は潜在していたのかもしれない。

同様のことは、波多野秋子についてもいえる。秋子の心中相手は有島武郎でなくてもよく、吉野作造が選ばれたかもしれないからである。だとすれば、秋子もまた、吉野にとつて「嘆きの天使」であった。大倉燐子の証言が正しければであるが。そして、吉野の女性関係を証言した燐子も、それと絡めながら、実は自身と吉野の個人的に親密な関係を暗示している。吉野の二人の女性の暴露は、燐子の嫉妬心の表れではなかったか。彼女は、三人目の「嘆きの天使」であったのかもしれない。

吉野作造と「嘆きの天使」たちの人間関係は、燐子の書く探偵小説のように錯綜している。傍証が少ないのが難点だが、吉野の女性関係という問題にかぎっては、結局、燐子の証言に辿り着くことになる。大倉燐子の「吉野作造の側面」は、事実の証言ではなく、一編の小説であったのかもしれない。あるいは、一種の追悼文と考えることもできるだろう。「嘆きの天使」たちのうち、波多野秋子はもとより、花園歌子も吉野作造に追悼文を手向けているわけではない。けれども大倉燐子だけは、吉野が亡くなって四半世紀も経つてからではあるが、「吉野作造の側面」と題して追悼文を寄せたのではないだろうか。その媒体は『日本古書通信』、これも斎藤昌三が主宰した雑誌である。

明治文化研究会は、斎藤昌三といい宮武外骨といい尾佐竹猛といい、古書をめぐる好事家たちの埃っぽい集まりであったようにみえる。ところが、彼らの中心にいた吉野作造博士のまわりには、「嘆きの天使」たちが乱舞していた。波多野秋子、花園歌子、大倉燐子、みな才女ばかりである。

直接にはドイツ留学時代に親しくしていた女学生についてであるが、やはり「吉野作造の側面」のなかで語られている。以下は燐子と吉野の会話である。「でもお友達なんか、なかつたんでしょう?」「ありましたよ。大学の学生と親しくしていました」「まあ。先生が大学の学生さんと親しくしていらしたなんて、奥さんがお聞きになつた

ら大変でしょう?」「だから内緒にして置いて下さい」「先生もなかなか隅に置けないんですね」「人間ですもの、当たり前ですよ」³⁰⁾。秋子にも歌子にもそして燐子にも、当てはまりそうな文脈である。

四 明治文化の三博士

天使から博士に話題を転ずる。明治文化研究会は、三人の博士を中心に運営された。「法学博士」吉野作造、「無用学博士」尾佐竹猛、「雑学博士」宮武外骨の三博士である。³¹⁾そもそも、明治文化研究会の構想は外骨が吉野に持ちかけたものであったこと、その際、吉野が尾佐竹を誘う提案をしたこと、吉野が初代の会長を引き受けたこと、吉野の死後は尾佐竹が第二代会長となったこと、こうしたことがらはすでに述べた。

尾佐竹猛は明治法律学校で法律を学び、やがて大審院判事となった。彼は無用学博士を名乗って、幕末や明治維新の研究をおこなっていたが、吉野作造の勧めもあり、「維新前後に於ける立憲思想」によって、本物の法学博士の学位を得た。尾佐竹は、幕末から明治維新にかけての憲法史研究の第一人者であった。

吉野作造が亡くなった際、尾佐竹猛は二つの追悼文を書いている。すなわち、『中央公論』の特集には「吉野博士の明治文化研究に就て」を、『故吉野博士を語る』には「明治文化研究の母としての吉野博士」を寄稿した。いずれも、吉野の明治文化研究への関わりについて論じたものである。

このうち、「吉野博士の明治文化研究に就て」は、前半が吉野作造を新渡戸稲造に重ね合わせた人物論で、後半が吉野の明治文化研究に対する評価となっており、標題との関係では尾佐竹自身の認めるとおり、やや「支離滅裂」の観は否めない。とはいえ、明治文化、とくに明治憲法制定史の研究における吉野の業績については、さすが

に的確に評価している。次の文章は、吉野亡きあと、当時は尾佐竹にしか書けないものであったろう。

「極く手近な一例を挙げると、『西哲夢物語』の秘密出版は、明治政治史上の有名な出来事で、これに関係した人々も、現存して居る。しかも、その書冊の正体を突きとめたものはこれ迄なかつたのである。それを博士は大正十年に入手せられてから研究を積み、伏見宮貞愛親王が伯林にて、グナイストの講義を聴聞せられた講義筆記が、元老院版となり、それを自由党の壮士の手に依つて秘密に出版せられたといふ径路が、漸く明らかとなつたのは、博士の絶筆となつた『スタイン、グナイストと伊藤博文』の一節である。」³²

『西哲夢物語』の秘密出版は、憲法史的にも政治史的にも重要な意味をもつ事件である。伊藤博文らによる憲法制定がドイツ憲法を下敷きにしたものであることを自由民権派が暴露するべく、グナイストによるプロイセン憲法講義などを「西哲夢物語」と称して出版頒布したのであった。

この事件は、幾重にも明治文化研究会に関わっている。吉野の『西哲夢物語』研究は、この小冊子を古書の中から見つけたことに始まるのだが、尾佐竹が証言するように、吉野はグナイストの講義筆記が伏見宮の留学土産であることを突きとめた。だがそれだけではない。憲法発布の直後に宮武外骨は「大日本頓智研法」事件を引き起こして石川島に入獄したのだが、その檻房の前住者は星亨であったし、伊藤仁太郎とは同窓の仲間となった。彼らこそ秘密出版の当事者たちであった。さらに、吉野の発見を受けて、斎藤昌三は『西哲夢物語』の陰影」を書いているし、今中次磨や木村毅も『西哲夢物語』の解説を書いている。³³ すなわち、明治文化研究会の主要な同人が、それぞれの持ち味を生かしながら、『西哲夢物語』に取り組んでいるのである。

尾佐竹のもう一つの追悼文、「明治文化研究の母としての吉野博士」についても紹介しておこう。尾佐竹は吉野の論文「明治文化の研究に志せし動機」を引用して、彼にとつて明治文化の研究はけつして「時勢と掛け離れた閑事業」ではなかったことを強調する。尾佐竹は吉野が明治文化研究を志した肝心の契機については、引用文そのものからは省略して、あとからそれを補足している。³⁴⁾そこに書かれているのは、まさに明治憲法制定の秘密に迫ろうとする吉野の姿であり、それが『西哲夢物語』の研究につながることになる。

尾佐竹は、『明治文化全集』の編集作業における吉野の業績と苦心を紹介したうえで、ついに『明治政治史』を書き上げえなかったことにつき吉野を擁護する。前後に比べて、同志としての感情が強く籠もったせいも、文章がやや乱れている。

「冗談じゃない、そんなに簡単に、明治政治史が書けるものなら、なにも心配は要らない。博士の絶筆となった『改造』誌上の「スタイン、グナイストと伊藤博文」の一篇の如きは、東京朝日新聞の『古書珍書』に書かれた如き、多年苦心研究の結果である。伊藤博文が、どんな風に、憲法を研究したかといふ如きは、政治史や憲政史の一ページにありさうなことであるにも拘はらず、今日まで、誰人も書いたものはないぢやないか。現代の政治家や、政治学者が、博士以前に、これ程の研究を発表したものがあつたら、お目に懸あからない。

また、憲法発布以前に於ける憲法私案や、憲法法案の如きも、疾くに知るべき筈であるに拘はらず、博士がその研究を纏めて発表された昭和三年以前には、他に何等見るべき労作がなかつたではないか。³⁵⁾

ここにも、吉野の「スタイン、グナイストと伊藤博文」が出てくる。伊藤博文は憲法調査のために渡欧し、ベル

リン大学のグナイストとウィーン大学のシュタインのもとでドイツ流の憲法学を学んだ。このことは明治憲法の制定にとって、決定的な意味をもっていた。この論文は、『改造』の昭和八(一九三三)年の二月号に収載された。尾佐竹のいうように、「絶筆」の論文である。

少々こじつけると、グナイストの地方自治論もシュタインの社会王制論も、ヘーゲル法哲学の影響を大きく受けている。かつて吉野作造は、『ヘーゲルの法律哲学の基礎』を書いて学界に登場したが、だとすると、最後にヘーゲル法哲学に戻ってきたとすることもできるだろう。明治文化は、法や政治に関するかぎり、少なくとも憲法学に関するかぎり、かくもドイツ的ヘーゲルの国家論の枠組みの内にあつたということか。

最後に宮武外骨である。外骨の追悼文は、『中央公論』の小特集にも『故吉野博士を語る』にも見あたらない。しかし、宮武外骨も追悼文「吉野作造先生の遠逝」を書いており、それは『公私月報』の第三十一号(昭和八年)に載っている。

『公私月報』は、東京帝国大学の法科大学に併設された明治新聞雑誌文庫の、いわば私的な機関誌であつた。明治新聞雑誌文庫は、やはり関東大震災を契機に、博報堂の寄付によって帝大構内に設立された。その際に吉野作造をはじめ穂積重遠や中田薫ら法科大学の教授陣と博報堂社主の瀬木博尚とを仲介したのが宮武外骨であり、彼は文庫主任として帝大の嘱託に就任した。明治文化研究会が明治文化研究のための人的集まりであるとすれば、明治新聞雑誌文庫はそのための一大書庫となつた。外骨は『公私月報』を発行して、文庫の資料蒐集状況を逐一報告するとともに、彼自身の個人的日報を臆面もなく載せて、公然と「公私混同」の雑誌を作り上げた。

外骨の追悼文は短いのだが、吉野の生前の写真を掲げている。それは『故吉野博士を語る』の扉に掲載されたものと同じで、書齋で執筆する吉野を撮つたとされる(大正十年撮影)。もつとも、写真の吉野は背広姿であり、

自宅書齋というよりは大学の研究室で撮られたもののようにみえる。掲載順からいえば、『公私月報』のほうが先で、次いで『故吉野博士を語る』で用いられた写真の順だ。

宮武外骨は、「大日本頓智研法」の筆禍事件で名を馳せた『頓智協会雑誌』をはじめ、奇妙な雑誌を次々に発行し、そこで独特の政治風刺とか言葉遊びをおこなった。こうしたこともあり、また「外骨」なる妙な本名とも相まって、社会の拗ね者たることを自任していた。しかし外骨の追悼文は、吉野への感謝を吐露した、きわめて誠実な文章である。外骨は吉野とは十五年来の知己であることを述べたあとで、以下のように続けている。

「此後、予と吉野先生とは相往来する親密の仲と成り養女結婚の媒介をもなされ、予の大学法学部入りは中田薫先生の推挙に因るのであるが、其中田先生と予との紹介者は吉野先生であり、穂積重遠先生の眷顧を受けるに至つたのも亦吉野先生のお蔭である、予の性格を誤解する者で、吉野先生に対して『アンナ者と交際しないがい』と忠告がましいことを云つた人が二三あつたさうだが、吉野先生はイツモ『キミは外骨君を知らず、世間の蔭口を信じて非難するのであらう、彼は誤解さるべき性格、其誤解を気にしない性格、世間に偽善者は多いが、彼は唯一の偽善者である、我は偽善者よりも偽善者を好む』とハネツケられたさうである、此弁護の一条だけに就ても、吉野先生は予を理解せし恩人であり莫逆であつたと云へやう」^⑧

外骨の偽善者ぶりは、吉野の弟子が外骨の養女を略奪して結婚するという企てにも發揮された。吉野作造は、その共犯役を引き受けた。^⑨これも「前科者」の娘に幸せな結婚を願う、親心ゆえの苦心の演出であった。これについては別の機会に詳しく紹介することとして、ここでは、吉野の最期について、やはり外骨の文章を引いておきた

い。「吉野作造先生の遠逝」を載せた『公私月報』には、外骨の「公私混合日記」欄がある。以下は昭和八(一九三三)年三月分からの引用である。

「同十八日 吉野先生危篤の報に接し、早朝より相州逗子の湘南サナトリウムに行く、其重態を見て落涙を禁じ得ざりし、注射の効力にて明朝までは持続せんと聴き、翌日の再来を期し、午後七時尾佐竹先生と共に辞して帰宅、其後二時間にて遠逝、遺憾

同十九日 昨日「外骨君が判つた」と応ぜし吉野先生、今日はナキガラとして駒込神明町の本宅に仰臥 火災避難が原因など返らぬ繰言を並べつ、お通夜

去日吉野先生来訪の節「私は医者者の云ふ通りを厳守するから当分死にませぬ」と云はれた事を追想して、今更ながら人生のハカナキを悟つた⁽³⁾

吉野作造は不調を感じて一月に東京の賛育会病院に入院したが、三月には逗子の湘南サナトリウムに転院した。入院当日の夜に病棟が火事になって病状が悪化したことは、外骨の記事中にもみられる。吉野作造の危篤の知らせを受けて、宮武外骨も尾佐竹猛も病院に駆けつけたが、臨終の場に居合わせることはできなかつた。享年五十六歳。

すでに紹介したように、尾佐竹によれば、吉野作造の絶筆は論文「スタイン、グナイストと伊藤博文」であつた。それはそのとおりだが、吉野にはもう一つの「絶筆」がある。すなわち、鈴木安蔵への葉書である。

この葉書は、鈴木安蔵の「憲法学三十年」の冒頭に掲載されている。併せて、宮武外骨が「公私月報」に載せ

松克磨が『故吉野博士を語る』に載せたのと同じ、書齋で執筆中の吉野作造の写真も掲げられている。鈴木苑の葉書は、「二月十九日夜」とあり、本所の「賛育会」病院から出されている。つまり湘南に転院する前に書いたものである。

鈴木安蔵は憲法史学者であるが、吉野の第二高等学校以来の友人であった栗原基の娘婿である。吉野や尾佐竹につづいて鈴木も明治憲法の制定史を研究しており、その関係で岳父をつうじて吉野に面会を求めた。最初の面会は、一月九日に実現した。ちょうど、吉野が「スタイン、グナイストと伊藤博文」の原稿を書いている時期である。二度目の面会は、吉野の入院や転院により叶わなかったけれども、絶筆となった葉書は、吉野が病室から鈴木との面談を求めたものであった。³⁹ 吉野作造は、明治憲法制定史の研究を鈴木安蔵に託したのである。

十 十

昭和四十一(一九六六)年のことであるが、故郷の宮城県古川市に吉野作造の記念碑が建立された。この「古川学人吉野作造之碑」は、題字を政治評論家の長谷川如是閑が、碑文を初代最高裁判所判事の河村又介が揮毫した。二人とも吉野の生前から交流があり、例の『故吉野博士を語る』にも追悼文を寄せている。古川学人とは、吉野が好んで用いた筆名である。

「古川学人吉野作造之碑」なる題字は、功なり名を遂げた偉人が死に臨んで生まれ故郷とのつながりにこだわったという意味で、石見人森林太郎つまり鷗外を連想させないだろうか。森鷗外にとつての「舞姫」のように、吉野作造の周囲には「嘆きの天使」たちがいた。彼女たちの存在は、怪人たちの明治文化研究に大正文化の華を添えている。

注

- (1) 赤松克麿は『中央公論』に掲載された八編の追悼文をそのまま『故吉野博士を語る』に再録したわけではない。長谷川如是閑は、『中央公論』の追悼文とは別に「吉野博士と私」を寄せ、尾佐竹猛は「明治文化研究の母としての吉野博士」をあらためて書いている。
- (2) 堅田「牧野英一のネクロロジ―自由法論を偲んで―」『獨協法学』第三九号、一九九四年、五一頁以下参照。
- (3) 牧野英一「親切と楽天―吉野君についての思ひ出―」、赤松克麿編『故吉野博士を語る』中央公論社、一九三四年、一三九頁。田中惣五郎「吉野作造―日本のデモクラシーの使徒―」三一書房、一九七一年、六三頁参照。
- (4) 同書、一四〇頁。
- (5) 同書、一四六頁。
- (6) 小松清「義父と着いた空」、『故吉野博士を語る』一六二頁。山口昌男「大正日本の『嘆きの天使』―吉野作造と花園歌子―」、同『敗者』の精神史』下、岩波現代文庫、二〇〇五年、一六八頁参照。山口の同著は、彼自身を学長とする「東京外骨語大学」グループの古本漁りの成果である。要するに、吉野論ばかりでなく、その全体が直接か間接に明治文化研究会につながっている。
- (7) 吉野の研究室が被災したとき、いち早く駆けつけた学生こそ、のちに反ナチス報道によってドイツから追放された鈴木東民であった。もっとも、彼は洋書ばかりを避難させたので吉野をがっかりさせたという。以下は友人小田忠夫の証言である。「また吉野作造先生の門下生であった頃、大正十二年の関東震災で東大が被災にあった。その時、吉野先生の研究室にいち早くかけつけて先生の洋書を身をもって避難させた。当時、吉野先生は明治、大正の日本古書全集の発刊をもくろんでいたの、東民さんの努力にたいして『何んだ洋書ばかり集めて避難させたのか』といわれ一寸がっかりさせられたと、ベルリン在住時代に聞いたことがある。」鎌田慧「反骨―鈴木東民の生涯―」講談社文庫、一九九二年、九三頁。
- (8) 山口「大正日本の『嘆きの天使』」一六九頁以下参照。
- (9) 『吉野作造選集』14、岩波書店、一九九六年、三八一頁。宮武外骨「明治文化研究会の満十周年」『明治文化』一九三五年二月号。田澤晴子「吉野作造―人世に逆境はない―」ミネルヴァ書房、二〇〇六年、一一二〇頁参照。
- (10) 吉野作造「斎藤昌三観」、斎藤昌三『少雨莊書物随筆』山口昌男監修、国書刊行会、二〇〇六年、二六五頁。山口、前掲書、一三九頁以下参照。

- (11) 斎藤「菟蕪と猥談——吉野博士の一面——」、「故吉野博士を語る」一九九頁以下。『書物展望』昭和八年五月号に初出時の題名は、「吉野博士の一面——菟蕪と猥談——」であった。
- (12) ただし、「鹿子木(?)君」については、哲学者の鹿子木員信の可能性もある。文脈から鹿子木孟郎と推定したが、なお調査をつづけたい。
- (13) 牧野「親切と楽天」一四四頁。
- (14) 田澤、前掲書、二二二頁参照。
- (15) 斎藤「菟蕪と猥談」二〇〇頁。
- (16) 木村毅「吉野博士と明治文化の研究」、「故吉野博士を語る」一三三頁。
- (17) 社会主義者の白柳秀湖は、「学者、思想家のガウンを著けた大親分」という題の追悼文を書いた。『故吉野博士を語る』二四五頁以下参照。
- (18) 木村「吉野博士と明治文化の研究」二二五頁以下。
- (19) 同書、二三五頁。
- (20) 今中次麿「教壇の吉野先生」、「故吉野博士を語る」六頁。
- (21) 川原次吉郎「政治学者及び政治史家としての吉野博士」、「故吉野博士を語る」六四頁。
- (22) 花園歌子『芸妓通』復刻版、高良留美子・岩見照代編、ゆまに書房、二〇〇四年、一七四頁以下。山口「大正日本の『嘆きの天使』」一三一頁参照。カールはイギリスの文明史家だが、『芸妓通』には彼の言葉として、「The true nurturing in These days is the Collection of Books.」¹⁾と一語が掲げられている。「近頃の本物の鉱床は、書物の蒐集である」といった意味だろう。吉野はこれを受けて、歌子の精進を称えているのである。
- (23) 花園『芸妓通』一七五頁以下。山口「大正日本の『嘆きの天使』」一三三頁以下参照。
- (24) 黒瀬春吉は花園歌子を次のように教育したという。「また話術を練習せしめむとしては社会主義者の演説レコードをあてがひ、一方、某漫談家が門を叩かした。その上、吉野作造博士が下に就かせてはまた女性文化史の研鑽に当らしめたこともあつたが、博士は黒滝〔黒瀬——堅田注〕の人物行状をいたく嫌厭、彼女にのみ此を奇特のものとして日々と懇ろに教導して下すつたと云ふは、蓋し当然至極と云はねばなるまい。斎藤昌三に交らしめたも亦、ほゞ同じ時代のことだつた。」正岡容「修むらさき」、同『下町育ち』新月書房、一九四七年、一〇二頁。山口「大正日本の『嘆きの天使』」一三九

頁参照。

(25) 正岡の記述(前注)によれば、歌子と吉野の出会いのほうが斎藤とのそれより早いようでもあり、斎藤の記述によれば、展覧会で出会ったのは吉野作造ではなく木村毅のようでもある。「昭和二年一月改造社を後援の円本資料展とでも称すべき明治文芸展を一手に引受けて銀座の松屋で催した時、木村君を訪ねて来たのが歌子で、その時彼女は明治の稀本『鬼歌々』を持参して呉れた。一芸者として洋装してゐたのは、当時としては珍らしく、銀座商店街でも洋装姿の花園といふことが評判になるほど、女の洋装は稀れであつたが、当今なら和装の方が探す位で僅か二十年間に時代は逆転してつた。」斎藤昌三『少雨叟交遊録』、後藤憲二編『斎藤昌三著作集』第五卷、八潮書店、一九八一年、二六五頁。山口「大正日本の『嘆きの天使』」一四三頁参照。

(26) 花園歌子「憲政史上の隠れたる一頁に就て」『明治文化研究』第四卷九号。

(27) 大倉燁子「吉野作造博士の側面」『日本古書通信』第二四卷一一号、一九五九年、八頁。山口「大正日本の『嘆きの天使』」一四九頁以下参照。

(28) 山口「大正日本の『嘆きの天使』」九四頁以下参照。

(29) 同書、一五一頁参照。

(30) 大倉「吉野作造の側面」八頁。

(31) 堅田「尾佐竹猛と法の雑学——明治文化研究の一素描として——」『獨協法学』第六八号、二〇〇六年、一頁以下。同「外骨雪冤祝賀会——大日本頓智研法始末——」『獨協法学』第七〇号、二〇〇六年、一頁以下参照。

(32) 尾佐竹猛「吉野博士の明治文化研究に就て」『中央公論』昭和八年五月号、一九三三年、本欄四〇九頁。

(33) 堅田「西哲夢物語、あるいは明治憲法制定始末」、同「独逸学協会と明治法制」木鐸社、一九九九年、二五三頁以下。斎藤昌三「西哲夢物語」の陰影」、同「少雨莊書物隨筆」七九頁以下。木村毅「吉野博士と『西哲夢物語』」『明治文化全集月報』第六号、一九五五年、一六九頁以下参照。

(34) 「然らば、博士は何時頃から、明治文化研究に従事せられたかといふと、前掲の動機の記事中には大正七年に、国家学会創立三十年記念出版たる『日本憲政経済史論』の編纂に奔走せる際、伊東巳代治氏の談話を聞くを得なかつた事からヒントを得たといふことである。」尾佐竹「明治文化研究の母としての吉野博士」、『故吉野博士を語る』四七頁。吉野作造「明治文化の研究に志せし動機」一〇〇頁参照。

- (35) 尾佐竹「明治文化研究の母としての吉野博士」五八頁以下。
- (36) 宮武外骨「吉野作造先生の遠逝」『公私月報』第三二号、一九三三年、七頁。
- (37) 外骨養女の「掠奪婚」計画につき、吉野「外骨翁と私」『吉野作造選集』12、一九九五年、一四二頁以下参照。
- (38) 「公私月報」第三一号、八頁。他に、長谷川如是閑「吉野博士と私」『故吉野博士を語る』一三頁参照。
- (39) 鈴木安蔵『憲法学三十年』評論社、一九六七年、三六頁以下参照。